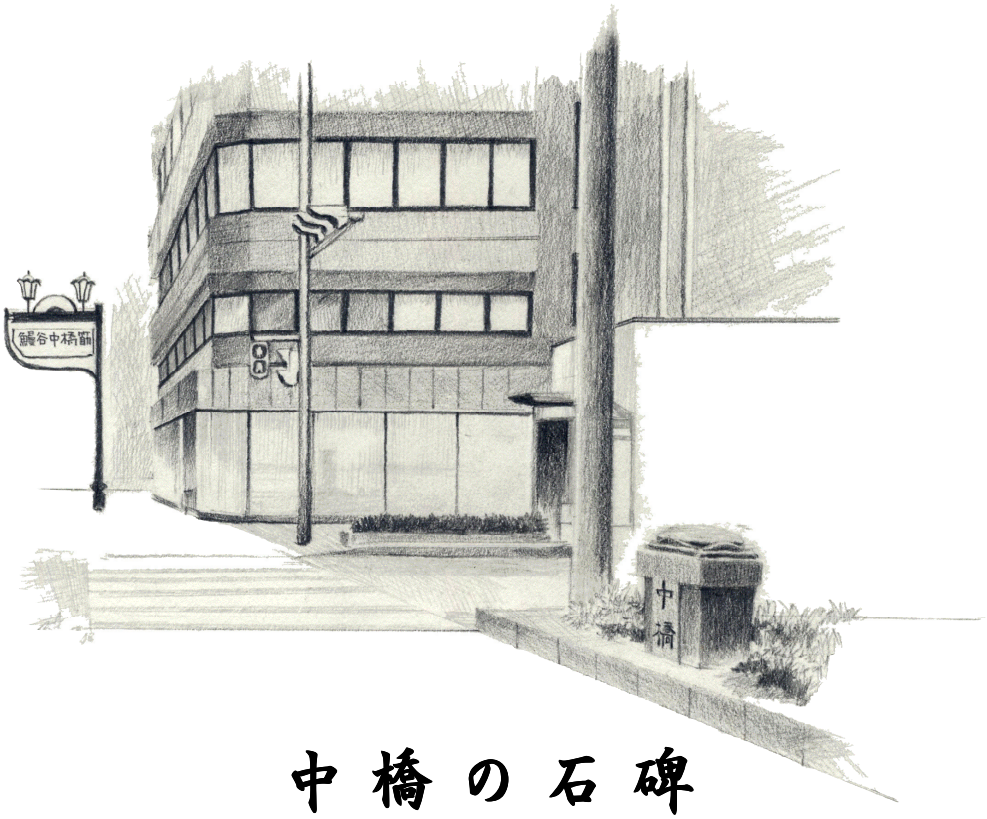
かさおか

発行所
天理教笠岡大教会
かさおか編集掛
笠岡市用之江377
郵便番号714-0066
(0865)
電話 66−1311
FAX 66−1314



中 橋 の 石 碑

をやの思いを にをいがけ、
内治(うちうち)に心を配り おたすけに誠の心を尽くそう

1．一歩前進 百万軒
2．おつとめの徹底と ひのきしん
3．機を逃さず おさづけの取次

表紙のことば

中橋の石碑　この石碑より向かって右側一帯に備佐の店舗・倉庫が在った

前回の途中に、「跣参りをしていて、褒められるかと思いきや、叱られて、それからは身許引受人でもある備佐・上原佐吉から櫛の歯を挽くように使いが来て、引き戻そうとする。そうして、とうとう備佐の家へ入る事となった。」と記した。身許引受人として、とよ(初代)の身体を心配しての事もあったと思うが、佐吉は恐らくとよ(初代)の信心の並々でない点に強く心惹かれて、養女にとの思いが強くあったのではないかと思われる。

この間の消息を笠岡分教会史年表には次のように記している。

明治四年　此の年晩秋折井家の幼児(生後七ケ月)大患、旧長様(初代の事)は此の幼児の苦しみと一家の悲嘆に痛く同情せられ、その頃最も霊験著しき噂ある清水様に一週間跣参りの願を掛けらる。朝は寅の刻より小田原提灯を点じて出られる。満願の日より幼児は全く死地を脱して快方に向かう。此の美行を知られたる備佐の主人・佐吉様は直ちに折井家に掛け合われ、旧長様を備佐に引き取る事を請はる。之れ旧長様の上原家に入家せらるる端緒なり。

明治五年　旧長様去年暮より備佐の内に引き取られ以来毎日裁縫を励まる。

又、笠岡大教会史には、

明治五年　一月、笠原儀七(上原佐助)妹イシを連れて伯父・上原佐吉を頼って上阪、備佐に入る

明治六年　この年春、川合とよ、笠原儀七と縁談進むにより伊賀の生家へ帰る。

この年暮れ　川合とよ、笠原儀七と明春結婚のため備佐へ入る。

明治七年　二月十六日　川合とよ　上原佐助(笠原儀七)と結婚(川合とよは以後改名して「さと」をなのる)

こうして年を追って出来事を眺めれば、初代(さと)の方が、先に娘分として上原家に入っている事が分る。血の繋がりは上原佐吉・佐助は伯父・甥であるが、親神様の采配による此の世での縁は、佐吉・さとの方が強かったのではないだろうか。さとが、結局、佐吉の願いを容れて笠岡へ帰って来たのも、その縁によるものではないかと感を強くする。

さて畳表商・備佐(備後屋佐助)にゆかりの地、長堀について書かねばならない。長堀は現在は長堀通り(国道308号線)となっているが、もともとは長堀「川」だった。心斎橋の東側には、この長堀川に東から藤中橋、中橋、三休橋の三本の橋が架かっていた。上原佐吉が畳表問屋・備後屋佐助、通称備佐の店を持っていたのは、中橋南詰西側一帯、鰻谷町であった。鰻谷町は西之町、中之町、東之町と地名があるが、恐らく長堀川の川筋に沿って備佐の店舗はこの三町にまたがって在ったものと思われる。現在は長堀が道路になっているために、鰻谷筋の北面の商店街の北側、長堀通りに広い歩道がある。この歩道は勿論長堀川であった訳で、言ってみれば鰻谷筋に面した備佐の店の裏側という事になる。そこを歩きながら、中橋の跡を探した。あったのは橋の名を刻んだ石碑であった。草に蔽われて見過ごしてしまうところであったが、何とか分った。三休橋はバス停として地名が残っているが中橋は、この石碑だけである。さとは備佐の当主・佐助に嫁して以来、大阪きっての畳表問屋の御寮はんとして、明治七年春から十八年始め迄、足掛け十二年、舅姑の佐吉・八重の心を安んじ、また大所帯の備佐の家内を安泰にして通った。

(史料部長　上原繁道)

秋季大祭講話

教祖にお喜びいただこう

世話人 島村廣義 先生

秋季大祭は、先程大教会長さんの祭文にもございましたとおり、立教の元一日を祈念してつとめるおつとめでございます。お祭りでございます。

立教の元一日、親神様は世界一れつをたすけるために天下ったと仰せ下され、人間宿仕込みの元なるぢばに、教祖を月日のやしろともらい受けたいと、旬刻限を待ちかねてお現れ下さり、ご宣言下さったわけでありますが、この親神様の最初のお言葉でも分かりますとおり、立教の本旨は、世界一れつをたすけるためにと仰せ下さるこのお言葉一語に尽きるわけであります。世界中の人間を余すことなくたすけ上げることにあると、はっきりとお述べ下されているのであります。

言い換えれば、世界一れつをたすけること、世界だすけが天理教が開かれた所以であり、世界一れつの陽気ぐらしがお道の目指すべきところであります。

おふでさきに

月日にハせかいぢうゝハみなわが子
たすけたいとの心ばかりで　八号 4

にんけんもこ共かわいであろをがな
それをふもをてしやんしてくれ　十四号 34

月日にハせかいぢうハみなわが子
かハいいゝばいこれが一ちよ　十七号 16

と、仰せ頂いておりますが、人間をお創り下された親神様から見れば、世界一れつはみんな我が子であります。ただたすけてやりたいの一念であられるのであります。

人間の親である親神様が、如何に一れつの人間を可愛く思われ、たすけてやりたいとお思い下されていますことか、そこで、この度は神が表へ現れて、何か委細を説いて聞かすると仰せ頂きます如く、親神様は人間をお創り下された時の、元初りのお約束である旬刻限を待ちかねて、即ち、天保九年十月二十六日を待ちかね、教祖をやしろとしてこの世の表にお現れ下さり、親神様直々、よろづ委細の真実をお明かし下されたのであります。

このよふのにんけんはじめもとの神
たれもしりたるものハあるまい　三号 15

親神様は元始まりに、泥海の中、紋型ないところから人間世界をおつくり下された元の神様。つくられただけではなく、命を与えられたものが、その命を全うすることが出来るように、常にご守護して下さる実の神様であります。即ち、人類の元なるをやであることを初めてお教え下さり、

月日にわにんけんはじめかけたのわ
よふきゆさんがみたいゆへから　十四号 25

と、人間をつくったその思いは、陽気ぐらしをするのを見て共に親神様も楽しみたいと、その創造の目的を、をやの思いを説き聞かせ、真実たすかる道、陽気ぐらしへの確かなたすけ道をおつけ下されたのであります。

世界一れつの人間を余すことなくたすけ上げたい、陽気ぐらしをさせてやりたいとの、思召下さる親神様の本心、これが立教のあのお言葉に全てお示し下されているのであります。

おさしづに、こんなおさしづがあります。

反対する者も、可愛い我が子、念ずる者はなおの事。なれど、念ずる者でも用いねば、反対同様のもの。

と言うお言葉でありますが、これは明治二十九年四月二十一日のおさしづでありまして、政府、官憲の迫害干渉が厳しくなった時にお伺いされ、お尋ねになった時の神様のお言葉の中の一節であります。

たとえ、親神様に反対する者であっても親神様にとってみれば、みんな可愛い我が子である。そ

のをやの心を知らない、をやの心を知らないから反対するのでありますが、その者達に人間の元なるをやを教え、元のをやの思いを伝えて、思召をわからせて、本当に真実たすかる道、陽気ぐらしへの道を教えてやりたいと、お思い下さいますのが親神様であります。

しかし、その親神様の思召をお聞かせ頂き、親神様の思召を承知しているお互いが、その教えを実行しなかったら、反対しているのと同様だと、用いねば反対同様のものとお教え頂くところを、私達はよく思案させて頂き、親神様の教えを日々に、実地に身に行のうて通らせて頂くということが、何よりも肝心であると思案させて頂くのであります。

『論達第二号』にもお示し頂いておりますが、先ずは、自らがお教えに基づく生き方を日々実行し、身近な人達に信仰の喜びを伝えることが肝要であると、お教え頂きます。

何にも知らない人々に、をやの思いを伝えるために、教祖をやしろとしてこの世の表にお現れ下さり、教祖のお口を通じて思召のほどをお聞かせ下されたのであります。

いまなるの月日のをもう事なるわ
くちわにんけん心月日や　十二号 67

しかときけくちハ月日がみなかりて
心ハ月日みなかしている　十二号 68

と、お教え頂きます。

なぜ教祖が、月日のやしろとお定まり下されたのか、その所以は、教祖は親神様が人間をお創り下される時、女ひながたにおなり下され、母親の役をおつとめ下されたいんねんある魂のお方様であったからであります。

このことは、おふでさきに

どのよふな事をふしへてかゝるのも
もとなるをやてなくばいかんで　八号 73

と、お教え頂くところであります。

どこそこで誰それというものではない、ほんの何でもない百姓家の者、何にも知らん女一人、何でもない者や。それ最後の教えを説くというところの理を聞き分け。何処へ見に行ったでなし、何習うたやなし、女のところ入り込んで、理をひろめるところよう聞き分けてくれ。

と、仰せられていますように、このお道は中山みき様の知恵や力、或いは修行をして悟りを開いた、そういうところから始まった道ではありません。

親神様が、何にも知らん女一人、その女のところに入り込んで、世界一れつがたすかる最後のみ教えをお開き下されたのであります。世界中の人間をお創り下された親神様が、元なるをやのいんねんをお持ち下される教祖に入り込んで、直接、をやの思いを子供である人間にお教え下されたのであります。これをしっかり心に治めて通らせて頂くことが、信仰の根本であります。

しかし、人間というものは割と疑い深いものでありまして、教祖からお教え頂くことでも一つ一つそれが姿形になって、或いは実証されないとなかなか信用できないもの、信心することが出来ないのが人間でありますが、ひながたの中に、ご本席様の道すがらを以ってお示し頂く如く、教祖を信じ切って、もたれきって通らせてもらう私達の信仰の有り様をお教え頂いております。真っ正直に通るようにお促し下されているわけであります。

教祖を信じて、心一つで陽気ぐらしが出来る、このひながたの道をひながた通り真正直に辿らせて頂いて、陽気ぐらしの足取りを進めさせて頂くことが何よりも大切なことであります。

ご本席様の道すがらの中では、たすけてやろう、たすけてやるけれども天理王命という神は初めての事なれば、誠にする事難しかろうと仰せになり、素直にをやのお心に従えば、おたすけ頂くことをお諭し頂いておりますが、更に神様はたすけてや

ろうと仰るに付き、案じては行かんと、重ね重ね素直に親神様を信じて、お凭れして通るようお諭し下されているのであります。

私達の道の初代も皆、多かれ少なかれ、こういう道を通って歩んで下さった一日があって今があるわけであります。

立教の元一日の、私はおひながたから常に申すことでありますが、おひながたは、私達が辿らせて頂く手本・ひながたでありますから、立教の元一日の出来事も私達が通らせてもらう手本・ひながたであります。

私はこれを私達の入信の元一日によく置き換えてお話しをさせて頂き、また、私もその様に思案させて頂きながら通らせて頂いているのでありますが、それぞれに身上・事情をおたすけ頂いた時の事、お道にお引き寄せ頂いたことをご思案頂きたいと思いますが、親神様はたすけ一条の御用の上に使いたいから、身上・事情に手引きをし、しるしを見せてお導き下さり、お引き出し下さって、お連れ通り下さった。それがこの立教の元一日と同じように悟らせて頂けるように思うのであります。

中山家の方々は、お三方それぞれに身上をお見せ頂かれ、たすけて頂きたい一心で神様にお願いをされるわけですが、その願い出に対して神様のお言葉は、先程お話し申したお言葉でありまして、身上をたすけてやろうというお話しは出ておらないわけであります。世界一れつをたすけるためにという親神様の思召し、そのために、みきを神のやしろに貰い受けたいというお言葉であります。無論旬刻限のお約束があり、また、御現れ下さったその場所は、人間宿仕込みの元なるぢばであります。

私達にとってみれば、身上・事情をおたすけ頂くそのお引き出しは、皆たすけ一条の御用に使いたい。それぞれをよふぼくとして、たすけ一条の上にこれから立ち働いてもらいたいと、親神様がお引き出し下さったことだと思わせて頂くのであります。

立教の元一日を祈念してつとめるお祭りの時には、常にそうして自分たちの信仰の元一日を思案させて頂くとともに、ひいては立教の元一日、また、親神様が人間お創め下さった始まり出しの元一日に思案をして、しっかりその親心にお応えする道を、心定めて通らせて頂くこと、これが大祭をつとめることの意義だと思わせて頂くのであります。

お互いに立教の元一日を思案させて頂きます時に、それぞれのお道を、信仰を初めさせて頂いたこと、我が自らのことを思案させて頂きながら、そこに思召し頂く親神様の親心、教祖のお心をしっかり思案させて頂いて、それにお応えする道を歩ませて頂くという事が一番大切な事だと申したいのであります。

三年千日と仕切ってつとめさせて頂いて参りました教祖の百二十年祭の活動も、あと三ヶ月余り、本当に最後の仕上げと申しますか、それこそ脇目も振らず、最後の追い込みをさせて頂かねばならない最終段階に立ち至りました。

今年の春の大祭の時に、真柱様はどうでも教祖にお喜び頂けるような成人の姿を御覧頂きたいと、自ら心に定め、そして、つとめて来たことをやり遂げることが出来るように、仕上げというに相応しい、一つ悔いのない通り方をして欲しいと仰せ頂きました。

今迄三年千日、特に仕上げの年として本年のそれぞれの歩んできた道すがらを反省させて頂きながら、しっかり最後の仕上げに向かって突き進ませて頂きたい、このように思わせて頂きます。

申し上げるまでもなく、教祖の年祭をつとめさせて頂く根本は、私たちお互いの成人、その成人

をお急き込み下さりお促し下さる上から、教祖が定命を二十五年お縮めになって現身をお隠しになったことに由来するわけであります。

世界一れつをたすけるために、一日も早く陽気ぐらしの世の様に立て替えてやろうと思召す親心から、教祖はたすけ一条の道をおつけ下されました。

おつとめを教え、世界たすけの上に、このつとめの理によって陽気ぐらしに立て替えてやろうとお教え下されたおつとめ、このおつとめを誰に気兼ねすることなく充分につとめさせて頂けるように、教祖はして下さったんであります。

また、誰はばかることなく、にをいがけ・おたすけへ、布教が出来るようにして下さった。子供可愛い上からの教祖の親心、これが二十五年先の定命を縮めて現身を隠された理由であります。

教祖の身上に異常を見せて、切迫する身上を台にして、お仕込み下されたことは、たすけ一条のつとめのお急き込みをお促し下さるとともに、あらゆる人間思案を断ち切ってひたすら親神様を信じ、親神様にもたれ切って通る神一条の通り方を厳しくお仕込み下されたのであります。

初代真柱様を芯にして先生方が真剣、それこそ命がけでおつとめをつとめて下さったその様子などは、御伝をお読み頂きますと詳しくお書き頂いておりますが、仰せ通りにおつとめをつとめさせて頂いた。

きっと教祖は元気におなり下されてあると思われたであろう先生方でありましたが、お姿をお隠しになったということ、つとめを無事終えて、かんろだいのところから意気揚々と引き上げて来られたご一同が、お姿を隠されたということを聞いて、みんなうわーと悲壮な声を上げて、泣いただけで、あとはもうしーんとなってしまった。咳(しわぶき)一つする者はなかったと、御伝には書かれています。全く立っている大地が砕け、日月の光が消えてしまい、世の中が真っ暗になったように感じたと、当時の先生方の驚愕、落胆された様子が述べられています。

官憲の迫害干渉の中、命がけでおつとめをさせてもらうと、教祖に直接御苦労をかける、その御苦労を思うとなかなかおつとめが出来なかった。その中を決断をし「命捨てても」という者だけ、それぞれに真剣におつとめをされたその結果が、現身を隠されるということになったわけであります。

嘆き悲しみだけでは事が進みません。内蔵の二階で、飯降伊蔵先生を通して、おさしづを伺われるわけでありますが、それが有名なおさしづ「さあ、さあ、ろっくの地にする」という一連のお言葉であります。

事前に、「扉を開いて地を均らそうか、扉を閉まりて地を均らそうか」と、神様からお問いかけ頂いた事に対して、扉を開いてろくぢに均らし下されたいと、閉めるより開けていた方が明るい、陽気な感じがするところから、そのようにお答えなされた先生方のお気持ちもよくわかるのでありますが、まさか扉を開くという、そう仰せ下さることが、教祖が現身をお隠し下されることを意味しているとはお思いにならなかった当時の先生方。親神様はその返事をお聞き届け下さり、心通りの守護をなされたのであります。

しかし、このことによって見せられた姿は、親神様の思召とは大きな隔たりがあったんであります。この隔たりが、言わば二十五年先の定命を縮めて現身を隠される結果に結びついたと、思案させて頂くのであります。

子供可愛い親心ならではのお心配りで、子供の成人を促されるとともに、現身を隠されることによっておつとめをつとめることに踏み切れなかったその原因を取り除いて下さった。

今からいよいよ世界を駆け巡ってたすけをする。しっかり見ていよ、今までとこれから先とどう違うて来るかしっかり見ていよ。さあ、これまで子供にやりたいものもあった。なれども、思う

ように授けることが出来なかった。これから先、段々に理が渡そうと、おさしづにお書き下されてありますが、ひろくさづけの理をお渡し下されるとともに、積極的な世界だすけの道、たすけ一条の道の展開をお促し下されたものと、思案させて頂くのであります。

教祖は現身をお隠しなされましたが、お魂は元の屋敷にお止まり下さって、ご存命のまま世界一れつのたすけにおはたらき下されているのであります。

これが教祖年祭の元一日の出来事であります。

現身を隠されるということについては、親神様は前もっておふでさきでいろいろとお記しになり、つとめの模様立てを整えていかれるとともに、仕切って神一条のつとめ方を厳しくお仕込み下さっています。

以前にも此処でお話しを申したと思うんですが、お姿を隠される十三年前、明治七年に、

十一に九がなくなりてしんわすれ
正月廿六日をまつ　三号 73

このあいだしんもつきくるよくハすれ
にんぢうそろふてつとめこしらゑ　三号 74

と、このようにおふでさきに、教祖が現身をお隠しになることをご予言下さっているのであります。

教祖を目標に、社会の迫害が段々段々激しくなる。そういうところから、道が遅れる。教祖は二十五年のご寿命をお縮めになり、姿をお隠し下され、世間の圧迫を少なくして道をひろめる模様立てをする。それまでに真柱も定まり、かんろだいも建設されるから、皆皆の心を澄まして早く人衆揃うてつとめごしらえに取り掛かるようにせよと、お諭しになったんであります。

私はこのおふでさきをお書き下された明治七年、教祖七十七才の御時に執筆されたお歌でございますが、この明治七年という年は、本当に本教にとって大変重要な事柄があった年であります。

真柱を早く定めるようにと急き込まれ、また、かねてから教祖の里方の兄に当たられます前川杏助様に、かぐら面の制作を依頼なされていましたが、それが出来上がってかぐら面をお迎えに出られたり、またその出来上がったかぐら面を付けて、かぐら・てをどりをおつとめ下さり、毎日毎夜おつとめの稽古がなされるなど、着々とつとめの模様立てが進められていた時であります。

そんな時に教祖は、仲田儀三郎さんという先生と、松尾市兵衛先生この両名に命じて、大和神社へ行きどういう神でござると尋ねておいでと、お使いに出しておられるんであります。まさにこの時から教祖は、直々積極的な高山布教をお打ち出し下さり、教祖御自らその先頭にお立ち下されているのであります。

ここから教祖の御苦労が始まるんであります。神職に対して教祖は、学問にない古い九億九万六千年間のことを世界へ教えたいと仰せられ、また、山村御殿の節にあっては、親神にとっては世界中は皆我が子、一れつを一人も余さずたすけたいのやと仰せられて、教祖を自ら積極的に高山へ布教にお出まし下さるとともに、この年の十二月には御自ら月日のやしろであることを厳然とお示し下さる上から、赤衣をお召しになった。赤衣をお召しになるとともに、その赤衣のお召し下ろしをお下げ下さって、証拠守りとしてひろく人々にお渡し下されるようになり、更には、さづけの理をもお渡し下されたのであります。

年が明けると、明治八年はそれこそ、かんろだいのぢば定めがなされ、一層つとめの完成と成人を促されて、お急き込み下されるのであります。そうした時に、教祖は重大な時旬の迫っていることを、おふでさきを以って予めお教えになり、人々にそれこそ日限を切って、仕切って厳しくつとめ一条・神一条の道の通り方をお仕込み下されているのであります。

そして、二十五年先の定命をお縮め下さり現身を隠されて、誰に気兼ねなくおつとめが出来るよ

うに、誰はばかることなくにをいがけ・おたすけ、布教の出来るようにして下され、子供可愛い一条の親心、この親心を思案させて頂きますと、何としてでも教祖にお喜び頂き、ご安心頂けるように、お互いが成人させて頂くこと、これが教祖の年祭をつとめさせて頂く私達の心である。このように思案させて頂くのであります。

教祖の年祭は、つとめさせてもらわずにはおれない私達道の子のをやを慕う報恩の真心をもってつとめさせて頂くのであります。

その年祭活動も、今年はもう二ヶ月ちょっと、一月二十六日までというても、三ヶ月ということになってしまったわけですが、それぞれに、三年千日出発に当たって定めた心定め、それぞれに定めたとおり御守護頂いてお連れ通り頂いているかどうか、ついつい惰性に流れてしもうて、心定めとは程遠い結果になってしまっているということにはなっていないでしょうか。

心定めは、誰でもその気になったら定めることが出来ますが、それを定めたとおりに御守護頂く、その心定めを守り通すということが難しいんであります。その定めた内容の如何を問わず、仕切る期間が長ければ長い程、その達成を目指して思い念じて通りきるということはなかなか難しい。

教祖の年祭活動、三年千日と仕切らせて頂いておりますが、この三年千日という仕切方は、教祖の五年祭を前にした刻限のおさしづでお示し頂いているのであります。

口に言われん、筆に書き尽くせん道を通りて来た。なれども、千年も二千年も通りたのやない、僅か五十年、五十年の間の道を、まあ五十年も三十年も通れと言えば、行こうまい。二十年も十年も通れと言うのやない。まあ、十年の中の三つや、三日の間の道を通ればよいのや。僅か千日の道を通れと言うのや。千日の道が難しいのや。ひながたの道より道がないで。なにほど急いたとて、急いたとていかせんで。ひながたの道より道ないで。

と、仰せ頂くのであります。

陽気ぐらしへお導き頂くたすけ一条の道というのは、教祖のおひながたを辿らせて頂く以外に、外には道はないということをお教え頂くとともに、そのひながたの道を五十年も三十年も通れと仰るんではなしに、三年千日通ればよいと仰せになるんであります。

その三年千日の道を通ることが難しい。十年の中の三つ、三日の間の道を通ればよいと仰せですが、教祖のお通り下された五十年のおひながたを思いますと、三年千日はほん三日ぐらいのものだからしっかりひながたの道を通りなさいと、お諭し下されているように思案させて頂くのであります。

百二十年祭は諭達でお示し頂きますとおり、人をたすける心の涵養と実践と仰せになります。具体的なその行動はにをいがけ・おたすけであります。

にをいがけ・おたすけ、年祭活動の今だからこそ、全よふぼくがにをいがけ・おたすけを心掛けて貰いたいとも仰せられ、にをいがけ・おたすけは本当にそれぞれがたすかって貰いたい、たすかって頂きたいという誠真実が台となる。

だからそれは、私達の日頃の心使い、通り方に依る。それ故、日々教えに基づく生き方を私達自身がしっかり心掛けて、積み重ねて通らせて貰うという事が大切だということをお諭し頂いています。それで、この諭達を体して、それぞれに心定めをさせて頂きました。

日参を心定めした方もおられましょう。また、手ぶらで日参よりも、日々の理をもってお供えさせて頂き日々運ばせて貰おうと、つくし・はこびを心定められた方もおられましょう。また、教会の月次祭は欠かさず参拝させて頂こう。或いは、毎日十二下りのでおどりをさせて貰おうとか、お

つとめをしっかり覚えさせて貰おう、或いは、今までにをいがけなんか行ったことないけれども、一つチラシを、にをいがけ用のチラシをせめてポストへ入れさせて貰おうと、月々決めて、部数を決めてチラシ配りを心定められた方もおられましょう。また、毎日おさづけを取り次がせて貰おうと、三年千日心定められた方もあると思います。

心定めはそれぞれに違われましょうとも、教祖にお喜び頂きたい、教祖に受け取って頂けるような、少しでも自分の成人した姿、それを御覧頂きたいという心は、みんな同じであります。自らの惰性や、怠慢で心定めが滞らないように、旬の理を頂いて、一つ勇みに勇んで三年千日の仕上げに取り掛からせて頂きたいと思うのであります。

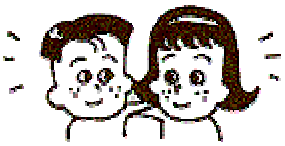
特に年祭では、私は今までにないつくし・はこびも大きく心定めて、一つ運ばせて頂きたい、このように思案させて頂く者の一人でありますが、別席のお話の中に、「この道は、若きも、年寄りも、男、女の隔てはありません。尽くした理はつんであります。尽くす理、運ぶ理によっていんねんの理も切って下さるんでありますから、これから先は教祖のお通り下された五十年の間の道筋、道すがら、いかな理もよく聞き分けてその足跡を踏んで通り、教えを聞いては日々変わらぬように心を定め、理を守り、道のため誠の心を奮い起こしてこうのうを積み重ね、人の為に苦しむは、後の楽しみ。我が身のいんねんの上から苦しんでいるのと違って、人のために苦しむは、後の楽しみ。づつなき事あれば節と思うがよろしい、節から良き芽が吹き、楽しみの道みえてくるんであります。」と、こうお取り次ぎ頂いているんですが、いんねんなら通らなきゃならん、果たさなきゃならん道を、教祖百二十年祭という旬の理を頂いて全てをお互いに出し切って尽くし切って、一つ教祖にお喜び頂けるような成人の姿を御守護頂きたい、このように思わせて頂くのであります。

仕上げの年も三ヶ月を残すのみとなりましたが、一つお互いにどうでもという精神をもって、仕上げの年を悔いなくつとめさせて頂いて、年祭の年には、教祖によう頑張ったなあと、言うて頂ける様につとめ切らせて貰いたい。また、この三年千日しっかりにをいがけ・おたすけにはたらかせてもらったその結果が、一年間おぢばを賑やかにさせて貰おうと仰せ頂きますが、教祖にお勇み頂ける様な姿に結びつきますよう、一つしっかりつとめさせて頂きたい、このことをお互いにお誓い申し上げて、本日の私のお話しを終わらせて頂きたいと思います。

ご静聴頂きまして、有難うございました。

《以上要約》

【4】人間はなんのために生きている



私たち人間は、なんのために生まれ、なんのために生きているのでしょうか。

科学文明が考古学が、かなり人間のなんたるかを明らかにしてくれました。しかし、どうしてもわからないことがあります。人間はいったい、だれが、何のためにつくったのか、ということ。

「親なる神（親神）が人間をつくり、その陽気ぐらしをするのを見て共に楽しみたい」という言葉に尽きます。陽気ぐらしは、人みんなが励まし合い、たすけ合いをする世界。みんなの願いは一人ひとりの心がけから。

天理教ホームページより　http://www.tenrikyo.or.jp/ja/top.html

本部女子青年大会

天理教婦人会主催の第二十四回女子青年大会は、本年九月から十一月にかけて、国内四十七会場、国外十一会場で、「あふれるご守護に感謝して、笑顔で喜び伝えよう」を、テーマに、開催されました。「教祖百二十年祭の年はおぢばがえりをする人達で毎日賑やかになるようにつとめてもらいたい。」という真柱様のお心に添わせて頂きたい上から、本会では今回の大会はおぢばではなく、女子青年のみなさんが、もれなく参加できるよう、各地域で開催して頂きました。「年祭には少しでも成人した姿で一人でも多くの友とおぢばへ帰ることを決意し奮起する大会にしたい」との婦人会長様のお思いもございます。「大会が目的ではなく私達の身の回りにあふれる親神様のご守護に感謝して女子青年活動のかどめを実行し、親神様・教祖にお喜び頂けるように成人させて頂きましょう」。又「教祖のひながたを手本に優しく温かく何があっても心倒さず喜びに変えていく強さと明るさ、人をたすける心をもつ女性へと育つ努力をする決意をもってこれからも歩んで下さい」と、心にしみるメッセージを頂きました。大会の内容は、ビデオ上映、式典、記念講演、親睦会とまたたく間に時は流れ、どの会場も女子青年が中心となり、心を合わせてひとつ〳〵創意工夫しこの大会を迎えました。又女子青年のあゆみ発表会(感話)に感動し涙する場面もありました。「教祖百二十年祭帰ろうぢばへおやさとへ」と、心誓いあい閉会しました。

（女子青年担当者　岡﨑豊子）

これからの生き方

私はこの22年間、布教所で育ちました。信仰のきっかけは両親や祖母の信仰からです。しかし、私にとっておつとめはほぼ「強制的な義務」でしかありませんでした。口には出しませんが、「何の意味があってこんなことをしなくてはならないのか」と常に思っていた時期もありました。また、親神様・教祖を恐怖に感じることもありました。それは、親に「おつとめや月次祭をさぼると怪我をしたり病気になる」と言われたら、本当にその通りになる時があったからです。その時は「なんて恐ろしい宗教だ」と感じていました。

そんな考えを変えるきっかけになったのは今回参加させていただいた女子青年大会です。お話も感動したのですが、私は当日受け取ったパンフレットに深く感動したと同時に、今後の生き方について考えさせられました。

私は両親からたくさんの愛情をもらって育ててもらったにも関わらず、わがままで、意地っ張りで、毒舌ただからと開き直り、平気で人を傷つけてしまう言葉を言うような性格です。

特に自分の嫌いなところは「ないものねだり」な性格でした。その考えを変えたのは今回の女子青年大会で頂いたパンフレット「小さな種の物語」

に記されていた「無いものばかり数えるのではなく、有るものを数えなさい」という言葉です。両親がいて、兄弟がいて、安心して寝られる家があって、食べ物があって・・・。日々当たり前のことに思えるすべてのものに感謝をして生きる。これが私の今後の生き方だと気付きました。

また、ネガティブ思考の私にとって、「親神様はどんな時も、その人にとって一番いいようにしてくださっている。目先の小さいことにとらわれずに、親神様がつけてくださった大きな道を歩いていけばいい」という1文も心に響きました。どんなにつらい時や道に迷ったときも、「親神様・教祖が見守ってくださっている。導いてくださる。」と思えるようになり、私にとって心の支えとなり、とても楽になることができました。つらいときや悲しいときは、神殿に行っておつとめをすると、とても楽になれるのです。

今一番考えていることは、「どうしたら一般の方にお道を分かりやすく伝えることができるか」です。天理教を信仰していない人に、いきなり「この体は神様からの借り物だ。ひのきしんをしたら徳をつめる。」などと言っても、嫌な顔をされるか、そんなことあるわけがないと信じてもらえないのが大半だと思います。実際友人がそうだったからです。

今の時点では、今まで親神様、教祖のご守護をいただいた経験を話すことが一番伝わりやすいと考えています。以前母親が死んでもおかしくない事故にあった際助けていただいたこと。私が交通事故に遭う前にお守りをなくし、事故後ぼろぼろになったお守りを兄が拾った事。これら親神様・教祖がお守りくださったことを話した上でおみちのお話ができたらと考えてます。

今後は一人でも多くの方におぢばに帰ってもらえるようによふぼくとしてがんばっていこうと思います。

女性としての徳分

福満分教会　福島佑佳

この女子青年大会は、前々から母にしつこく勧められ、「まあ、仕方がない。教会の娘だし、しばらくの間辛抱してこようか…。」というのが正直な気持ちでした。

ビデオでは、働きながらにをいがけに出る人、仕事を辞めて、教会のひのきしんに精を出す人等、画面に映る人たちの瞳は、生き生きと輝いていたのが印象的でした。

講話の中では、女性の徳分というのが心に残っています。

天理教って、なんか女の人が損をする様な、女だからこうしなければならないという様な物の考え方をすると思っていました。しかしこの大会が終わる頃には、女性であることの素晴しさ、喜びを感じることができました。私は、友達も多く、人からも好かれていると思っていましたが、もっともっと心を使うことで、周りの人達を明るく、和やかにすることができると思いました。

テキストの中に、私の好きなお道のことばが掲げられていました。この中でも、「よっしゃんえ、女はな、一に愛想と言うてな、何事にも、はいと言うて、明るい返事をするのが第一やで。」とい

うお言葉は、私のこれからの目標にしたいと思います。

笑顔で素直に「はい」と言う姿は、誰が見ても女性らしい姿だと思えるからです。

心の向きを変えたら

弓ヶ濱分教会　森川　歩

十月三十日に鳥取教務支庁で開催された女子青年大会に参加させて頂きました。

晴天に恵まれ、多くの参加者のもと始まった大会では、午前中にビデオ上映・婦人会長様のお言葉・記念講話があり、女子青年としての通り方をわかり易く教えて頂きました。会場には『あふれるご守護に感謝して笑顔で喜び伝えよう』と大きく掲示してあり、その言葉に目をやる度に今の私に足りない事だなあとしみじみと感じていました。

午後からはお楽しみ行事ということでダンスやゲームで女子青年同士の親睦を深めました。この度の大会が地元で開催されるということで、スタッフの方達は準備で忙しい合間をぬって出し物のダンスの練習をしていたと聞き、頭が下がる思いです。

私は結婚式場に勤めている為土日に休みをとるのが難しく、それを理由に日頃から天理教の行事には参加していませんでした。この度の大会も開催日を聞いた時点で婚礼シーズンの十月の日曜なんて絶対無理！と、休みをとる為の交渉をせず最初から諦めていました。しかし九月のある日、支部の委員長さんから「自分の都合をお供えしてなんとか参加してください！私も最後の御用と思って一生懸命準備を頑張ってます。」というメールを貰い、今迄の考え方を深く反省しました。早速神様に『絶対女子青年大会に参加させて頂きたいです』とお願いし、上司と交渉するとその日だけは1組も結婚式が入っておらず、休みを貰う事が出来ました。自分の心の向きを神様が喜こんで下さる方向へ変えると、いいように働いて下さるんだなあと感動しました。しかもそれからすぐに、以前から天理にお誘いしていた人が「行くと心が落ち着くという場所がどんなとこか行ってみたい」と自分から言ってくれました。その人は私の人生で初めての“天理教を知らない人へのおさづけ”を取り次がせてくれた人だったので、快くおぢばがえりえりを約束してくれたというのは本当に嬉しい事で、大きな喜びでした。そんな中での参加だったので、聞かせて頂いたお言葉を以前の自分よりは素直に心に治める事ができた気がします。

大会の締めくくりで、“来年は一人でも多くの友とおぢばへ帰らせて頂きましょう”とのお言葉があり、そのお言葉を聞いた時、何人かの顔が浮かんできました。来年はその方達とおぢばがえりをさせて頂けるように、頑張りたいと思います。

本部青年会総会

荒木棟梁の使命に燃えよう

福東分教会　藤井保人

去る10月27日、晴天の御守護の下、第81回青年会総会が本部中庭にて開催されました。

我が分会も会旗を先頭に一時間程前に入場、受付を済ませ、記念品を片手に、まだ空席の目立つパイプイスが広がる中、壇上正面という絶好の場所を与えて頂き、静かに時を待ちました。そうした中、ふと隣の方に目を向けますと、テープレコーダーを横に携えて参加されている姿に、何かしら心を打たれる思いがしました。多分、来れない会員さんに何とか親の思いを届けたいという心がそうさせるのだろうかと考えました時、私との意識の差に、始まる前にして感動と反省を受けました。その後、定刻通り式典が進み、真柱様よりお言葉を頂戴しました。その中で、

「日ごろ、信念を持って通っていて、自分は間違いないと思っていても、神様の思いとの間にずれが生じる時がある。親神様はそれを知らせるために、節を見せて下さる。その時に、謙虚に反省し、反省の上にさらなる実践を心掛けてこそ、心の成人が一歩進む。」

とお述べ下さり、改めて節に対する親の思召、心構え、通り方を反省させて貰いました。日々に現われてくる節において、大きいものもあれば小さいものもあると思いますが、全ては神様の計らいであると悟らせて頂いたならば、些細な事にでも親の思いを温ねることが大切であると思うのです。あらきとうりょうと自負するお互いは、どんな節に出会いましても、乗り越えるだけの若さと情熱を兼備えているのですから、燃えてその本分を発揮し、たとえ、不完全燃焼であっても、力を出し切る努力を重ね、切磋琢磨しながら、まずは三ヶ月後に迎えます教祖の年祭へ進みたいと思います。

笠岡分会におきましては、来年の総会に、「一教会が二名以上の方を御守護頂こう。」と心を定めさせて頂きましたので、年祭の動きと合せて取り組んでまいりたいと思います。

また、本部総会におきまして、遠近を問わず、多忙の中御参集下さいました方々へ心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

理によって

海松ヶ岡分教会　森本正典

立教168年10月26日、青年会笠岡分会の第一陣が、秋季大祭及び、青年会本部総会へ向けて出発した。他の分会が、どれだけ実動するのか気になる思いを抑えながらの車中、色々な事が頭に浮かんでは消えた。

私は、笠岡分会の一員として委員長の思いにどれ位、添わせて頂けたのか。本部の想いにどれ程、応える事が出来たのか。教祖120年祭目前の今。実動という名の数字にばかり気を取られ、理によって親神様に、お働き頂く事を忘れていなかったのか。批判を恐れていなかったのかなどと、さまざまな角度から自分に求めた。おぢばに着く頃には100%ではない自分が、大いにカラ回りしていた。

大祭は大勢の唱和で本部中が沸き立ち、神殿からは、人が溢れている。人々は皆、笑顔。まるで、念願かなっておぢばへとたどりついたかのようだ。我々は、一旦、詰所へ返り、実動につなぐべく、笠岡分会委員長と数名の委員で、お願いづとめへと本部に向かった。そこには、おびただしい数の青年会員が、ひしめきあっていた。

平日だと言うのに、世界中から集まった人々。そんな中、歳は20代後半だろうか、四、五人が「ひ

さしぶりやなあ」と話していた。会話の中に「お前、仕事休んで、大丈夫か？」「おお、もちろんクビも覚悟の上じゃ。この旬に、神さんの御用で、クビなら、因縁も切れる。最高じゃ!!」と。

私は、涙が込み上げて、仕方なかった。日は明けて、総会に、一番乗りを目指す笠岡分会は、開始2時間前に、出発した。聞けば、およそ45名もの参加。中には会員の手本にと、いくつかの教会の会長様の参加もあった。むろん婦人会、及び年配の方々の参加も含む。私が思うに、この身、どうなってでもと、おぢばに帰った人も、数多く有ると思いました。

共通して言えるのは、出きる理由をさがし、出きない理由を、さがさない人達だと言う事。

とにかく、旬におぢばへ帰りたいと願う。その理によって、状況が、変わっていくと言う事を、教えられたような気がします。そして、ならん中、皆さんに、行事参加の声かけに、全力を、尽くした委員長の理によって、これからの青年会が、ますます元気に、ますます熱くなってゆくのだと感じました。各教会につながる青年会員が少なくなっているという事を良く耳にしますが、反対に、どんどんと、増えている教会も、笠岡の中には実在するのです。きっと会長様の、理によって、心どおりに現われているのだと思います。自分が、上級へ日参をすれば、理の子も教会へと運ぶはずですし、行事に自ずと参加すれば、自教会の行事も、大勢の人で、賑わう事でしょう。先ず、自分が、成らん中、勇んで通る事が、大切だと思わせて頂けた今回の総会に、私も参加する事ができたのが、何よりも、親神様からの、御褒美であったと感じています。本当にありがとうございました。

ひのきしん

稲倉分教会　藤井和子

今夏こどもおぢばがえりに孫と一緒に帰らせて頂きました。

途中から岡山教区チャレンジ広場のひのきしんも兼ねてでしたが、その時笠岡詰所で会長様より修養科を考えておいて下さいと言われましたがお話をお聞きしても、そうだなぁー退職もしたし天理教の信仰も勧められるまゝについてしているだけで、自分からこれといって進んで何もした事もなく、せいぜいパンフレット配りとか、ひのきしんとかで本当に信仰は何だろうとは思っていました。

五日間の真夏の一日立ってするお茶所は夕方になると足がすごくだるく、明日は歩いて現場にたどり着くだろうかと心配して寝るものの次の日は何事もなく起きれ、早朝の神殿参拝もすんなり出来おぢばは不思議な所だと思いました。と申しますのもこちらに来るまで腰痛があり不安でした。

ひのきしんを終えて家に帰って三日間経った日、ふと私も修養科へ行ってみようという気になり、おぢばに帰って神様にもたれて通らせて頂けば三ヶ月はあっという間ではないか、お手ふりも、みかぐらうたも出来ないし、修養科へ入れば完璧に習得出来るという思いからです。

九月七七三期で修養科生とならせて頂きました。

最初に頂きましたおためしは組係でした。どんな方達がいるのか心配でしたが、このおぢばへ寄せられるいんねん、天理教という言葉を聞いて自分で入学している人々と思うと意外に気分は落ちつきました。

修養科生活は教理の勉強とひのきしん、授業教室は下見に行き、皆さんに迷惑がかからないように汗をかきながらの一ヶ月が過ぎました。

その一ヶ月も教養掛の先生、詰所の方々、笠岡の修養科生に助けられ、二ヶ月も過ぎようとして

おります。

教室での感話も一回は済みました。その感話も一番組係なので「はい一番さん」と担任の先生から、でも意外なのです。こんなに人前で話すのが苦手な私なのに、教壇に立つと皆様の顔がはっきり見え、思っている事がすらすらと話せたのです。とても嬉しかったです。

このおぢばで色々と御守護頂いております。

朝もやの中で午前の神殿掃除を終え神殿での朝づとめの日は一日中爽やかでした。

この三ヶ月一生懸命修養させて頂き、特に手をどりを覚えたいです。

修了させて頂きましたら、しっかり教会に運ばせて頂き、陽気に細々でも後々に続く信仰を考えております。

只私は修養科は若い時の方が良いなと思わせて頂きます。

一歩前進の時

福芦分教会　藤原徳美

特発性喀血症。最初に喀血したのが三年前の七月の末のこと。

出血した箇所が胸部と云うことで専門病院え入院。結核菌は無いものの結核患者に準じた治療を受け、七十日ほどで退院し、その後は一年目が一ヶ月に一度、その後は三ヶ月に一度の割合いで検診に行き、今年も一月の中旬、検診を受け異状なしとの結果で安心していたところ、一月の下旬、前回と全く同じように喀血。

土曜日の深夜と云う事もあり、病院を二転三転し、ようやく専門病院え運ばれたものの、その時すでに私の片方の肺は機能していないとの医師の説明があり、治療方法など話してる間に、私は意識はなくなり、一週間ほどは呼吸器に助けてもらい、今回と充分でなかった前回の傷の処置をしていただき、改めて肺に酸素を送ると二日ほどで元の肺に復活し、その後は動脈から造影剤を入れ肺の血管の中側から特殊な薬で破れた血管をふさぐ手術をしていただき、あと三日の命と云われ乍ら思いのほか回復が早く、今は元の体にもどり、おぢばの土を踏ませてもらっています。

病院のベッドで一人思いめぐらせている時、妻がもう仕事の事は考えないでおぢばに三ヶ月帰らせてもらったらと。私自身も今の仕事をどう区切りを付けるかその時一度は修養科えとの思いはもっており、今が良い機会と思い体力的にどうかと気に成っていましたが、すでに三ヶ月の半分が過ぎようとしております。

修養科のクラス四十名ほどですが、年令は七十過ぎから二十才の若者まで、親子孫とちがいますが、和気あいあいと楽しく過ごしており、特に若い人の先輩に対する態度が素晴らしく、とかく今の若者はなどと云いますが、見直しています。

又、若いから積極的に身上者の方、入院された方等へのおねがいづとめなどと時にはなごやかに時には真剣な毎日です。私も先輩の方方からは豊富な知識を、又、若い人からはあのあまりあるエネルギーをもらい乍ら教祖百二十年祭最後の年におぢばに帰らせていただいたよろこびを心にきざみながら感謝慎みたすけ合いの心で頑張って行きます。

談話室

「にをいがけ・おたすけ実修会」報告

川島郷分教会長　香取雅人

ある晴れた秋の日、高屋分教会で開催された「にをいがけ・おたすけ実修会」に参加させていただきました。

教会の玄関では、元気な少年会員達が鼓笛の練習に勤しんでいました。「そうか、今日は日曜日だったなあ」と、思いつつ参拝場に入ると突然軽快な音楽が流れてきました。

とても楽しく踊りだしたくなるような曲で、今日は幸先が良いと嬉しくなりました。

鼓笛隊の育成係の先生に伺うと『ペコリナイト』という曲で、来年のある大会を目指して“キネヅカ隊”が秘密練習を行っているのだと、人差し指を口の前に立てながら内緒で教えて下さいました。

さて、実修会は「にをいがけドリル」を参考にして進行させていただきました。

この「にをいがけドリル」を採用しますと、私のような未熟なものでも比較的円滑にまた楽しくプログラムを進めていくことが出来るので大変重宝しております。

ましてや、参加者がとても熱心な方ばかりで反応が鋭く、真剣に聞いてくださったので非常にしゃべりやすく、与えられた時間が驚くほど早く過ぎてしまいました。

プログラムは簡単な導入から、にをいがけ用のワーク(1)、(2)へと進み、短い講話をさせていただいた後、勇んで戸別訪問に出発いたしました。

当日は晴天に恵まれ、実修会に参加された大勢の方々と共に大変気持ち良くにをいがけに歩かせていただきました。

高屋分教会では、其々の方が担当の地域を決め、責任を持ってにをいがけに回らせていただいているということで、私が戸別訪問した地域は、普段は教会の役員先生が担当されている所でした。

したがいまして、どのお宅を訪問させていただいても非常に気持ちよく応対して下さり、中には「有難うございます」とお礼を言って下さる方もあり、戸惑うほどでした。

にをいがけ後の「ふりかえり」におきましても、参加された方が具体的に実働の様子をお話下さり大変有意義でした。

やはり旬の動き、親の思いに素直に添わせていただこうというところに、親神様、教祖からの大きな追い風のご守護を頂戴していると感じざるを得ませんでした。

私どもの教会でも、この時旬の大きなうねりに乗せていただけるよう、地道な日々の活動ときめ細かな丹精を心掛けて行きたいと改めて思わせていただきました。

結婚

神村分教会前会長　下田輝夫

見合いから二十三日目の挙式。貰う方はともかく来てくれる、イヤ来て下さる方は大変だったと思う。式当日教会に入る花嫁姿を垣間見て、初めて顔を見たのである。も少しキレイだと思っていたのに、面喰いの因縁が思わず頭を過ぎる。マテマテ因縁に引きずられては絶対駄目、神様が丁度良いと結んで下さった縁である。これを大切にしなければと、この時固く心に誓った。我乍らよくそんな気持になったものと感心している。それはさておき、好天に恵まれ式は順調に進んだ。話は

又横道にそれますが、私は小学校五年生の頃から白髪が有った。自分には見えないので気にした事はない。所が天理高校生の時、月次祭の後、今の綜合案内所から少し南に出た辺りで、女の先生がお話をして居られた。木船さんと二人で聞いていたら、若くして白髪の多い人は色情因縁の濃い人だと云われ私は思わず周囲を見廻した。誰か私の頭を見ていないかと。幸い誰も見ていなかったものの、その言葉は五十余年過ぎた今でも、昨日の如く脳裏に焼付いている。又柳井徳次郎先生からは、「金銭の間違いはともかく、色情の間違いは許すに許されんと神様が仰言る」と聞かして頂き、修養科では見るも因縁聞くも因縁と、よく聞かして頂いた。高校を卒業してすぐ修養科に入り、修了して家に帰って二ヶ月も過ぎぬ時に、次兄が色情の間違いから大きな事情を起した。まじめな兄がそんな事は絶対にしないと信じていたのに、矢張り男である。因縁のなせる事と思うが、同じ職場の女と関係を持ち傷つけた侭、其後職場をかわり後に他の女性と結婚して二児の父となった。そこえ其の女が入れ墨をした男を連れて来て、今で云う慰謝料の請求である。トテツもない金額を請求し、金が出来る迄帰らぬと居坐った。

其の時の母の心配(父は出直していない)する姿を見た時、兄貴の奴、何テ事をしたんだと思うと共に、色情の間違いの恐さと云うものが骨の髄までしみ込む思いがした。見るも聞くも因縁、私にもこんな事をする種がある事を神様は見せて下さったと思い、親に心配をかける様な事は絶対してはいけないと、この時つくゞ〜思った。若しこの事態を見ていなかったら、私も同じ様な事をしでかして居たかも知れない。大きな事情も見ず、神様のお話も聞いていなかったら、今迄どんな事をしているか知れたものではない。こう見えても若い頃は女性に好かれた方である。自惚れではなく因縁が色々と誘惑をしたのだろうと思うが、それに負ける事なくバカ真面目に過せたのは、神様のお話を聞いていたのと木船さんのお蔭である。彼の真面目な姿が私の心に勇気を与えてくれたのである。人間は真面目が一番、神様に認めて頂く事が肝腎である。

そんな事でまじめで女の肌にふれた事のない私が結婚して晴れて女に接する事が出来るのである。その楽しみや如何に……。

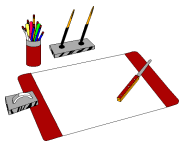
以下次回に

・原・稿・募・集・

内　容　①小随筆、②教会・布教所の独自の活動の紹介、
③俳句・和歌・川柳、④教会行事開催後の報告記事　等々

字　数　１０００字前後（８００字〜１２００字）
題名・所属教会名・氏名を明記して下さい。
俳句等は１句からでも結構です。

寄稿先　下記、大教会内『かさおか』編集掛宛ドシドシご寄稿下さい。



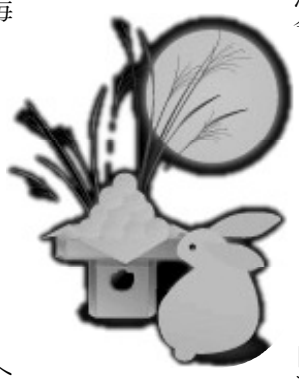
郵　便：〒714-0066 岡山県笠岡市用之江３７７
ＦＡＸ：０８６５－６６－１３１４
メール：**tenkasa@kcv.ne.jp**
尚、原稿はお返し致しませんので、予めご了承下さい。

温故知新

をや心

松都分教会　須山克子

「かさおか」誌編集掛より「温故知新」の命題で執筆の依頼を受け、どうしたものかと思案にくれましたが、私の教会の初代会長様よりお育て頂いた三十五年間の忘れ得ぬお仕込みの数々を書かさせて頂くことにいたしました。私は女学校三年生の時、学校の先生の結核が生徒に集団感染し肺結核の身上となり、昭和十八年修養科に入らせて頂きましたが、修了して帰っても体調はすっきりせず休んでいました。当時は戦時中にて、医師は殆んど軍医として出征し、残る医師は老令の先生ばかりで夕方になると往診にこられ、ヤトコニンという注射をして頂くのみでした。初代会長様は毎日お助けに運んで下さって、寝てばかりいても身上はよくならん、人を助けさせて頂いてこそ我身は助かるのだと云われ、朝九時になると家へこられ、私を床からひっぱり起こしてお助けにつれて歩かれました。ある結核の人の所へ毎日運ばれ、おさづけされる時は、私は室の隅で頭を下げてお祈りしていました。帰る道中「あんたは本当に助かって頂くように祈っていたのか。替えた便器は、そのまゝにしてあるし、室は臭いし、早く逃げたいとばかり思って、唯頭を下げていたばかりではないのか、明日からわしはこゝへは運ばんから、あんた一人でおたすけに運べ、枕許の痰壺の痰を、ぐっと飲む気持になったら自分の肺病は助かるのだ」と云われ、翌日から一人で運ばせて頂くことになり、おさづけ取次の後、みかぐらうたを一緒にとなえ、何日もそのまゝになっている髪をといて母親が下から持って来られた食事を、お話をしながら口に入れてあげたりしていました。食事が終わったら、あなたも食べてくれと持って来られたけど、箸を忘れたので、病人が今食べた箸で食べてくれと云われ、当時の私には、とても出来ない事だけれど、それでも神様がためされるのだと頂戴させて頂きました。三人の幼い子供達がトイレを使ったあとは、とても見るに見られぬ状態でしたが、私は毎日トイレ掃除をさせて頂いて帰りましたが私の性格として、石鹸で手を何度洗っても気がすまないのに手を洗わなくても何ともなく、夕方には医師が私の往診にこられるので、ねまきに着替えて床に入っていました。医師は動いてはいけないよ、今が一番大切な時だからと云って帰られるけど、毎日がこのような生活でした。然し家へ帰ると熱が出て苦しむ私は、いくら注射しても直らず、会長様がこられておさづけをして下さるとよくなる。それで会長様は教会に住み込んで人助けに歩かないと助からん人だと云って、教会(今の教会のこと)へつれて帰られると、うそのように元気になる。それを何度もくり返すうち、とう〳〵自宅で大変苦しみ、会長様は「生きてさえおればいつでも親子は会える」と云って教会へ連れて帰られました。六畳一間の当時の教会の長屋の家には、食べる物はありませんでした。



夜、背中の苦しい所を、柱の角でグッと押えて目をつむっていた時ガラッと戸があいて二人のおばあさんが入ってこられました。一人は大教会の淺野弥三郎先生の奥様、一人は米府の初代会長様の奥様三代マス様でした。米府から村尾ミヤさん(松都の初代会長様)が松江へ単独布教に出たとの事、そこへ行って見たいと淺野先生の奥様がおっしゃって島根分教会へ行かれた帰途お寄り下さったのです。その時私が苦しそうに柱にすがっている姿を見られて自分の胸を押えられ「あゝあんたはこゝの病気ですね、必ず助かる道を教えてあげる」とおっ

しゃったお云葉。それは今でもあのお声は、はっきりと聞こえてきます「理の親さまがコップにどぶ水を一ぱいくんできて「これをのみなさい」と云われたら「有難うございます」とそのどぶ水をのむのですよ、そしたらあなたの身上はすっきりと直るのです。分りましたか」と云ってお帰りになりました。お茶を差し上げるにもお茶も湯呑茶碗もない、たった六畳一間の部屋、昭和十八年のあの時の光景は忘れる事が出来ません。それ以後私はあのお云葉を事ある毎に思い起こして通らせて頂きました。長い年月になりますと元一日を忘れて、いつのまにやらわがまゝな心が出てきますが私にとっては宝にひとしい有難いお言葉です。山陰地方は山陽と比べて随分雪が多いと思います。終戦頃は、長靴は配給で運のいゝ人でないと履く事は出来ず、下駄に手作りの緒を作って履いていたから鼻緒が切れて足袋はだしで歩いた事も度々でした。朝お助けに出かける時会長様はお前の家の前を通っても必ず入る事はならん、家をちょっとでも見る事もならんまっすぐ前を見て歩けと云っておられたので私は家の前を通っても入った事はありません今でも教会のすぐ近くにポストがありますが私が家の近くを匂いがけに歩いていた時、丁度母が郵便を入れる為外に出たら、私が下駄をぶら下げて足袋はだしで雪の中を歩いているので驚いて呼び止めようと思ったが、娘は家も見ず、まっすぐに行ってしまった。あゝこれは会長様の仕込を素直に聞いて実行しているのだと思ったら涙が出て私の姿が見えなくなる迄両手を合わせて拝んでいたという事をあとから聞きました。その時はそのまゝ片原町という所迄行って、そこで写真屋のおばあさんが身上だと聞き匂いがかゝり以後長らく運ばせて頂きました。その帰途大工さんが屋根から落ちて医師が往診に行っている家へ匂いがかゝり、夜になって帰りました。今日は二軒匂いがかゝってうれしく思い私達の布教の家へ帰ったら、初代会長様から今迄どこに居ったか、あれ程須山の家へ寄ったらいけんと云ったのに今迄ごはんをよばれて寝て帰ったのかと大変叱られそんなまけ者は上へ上る事はならん、もう一軒匂いをかけてこいと云われたので、教祖のおともをさせて頂きますと云い乍ら「空襲警報発令」の中を外へ飛び出した事もあります。

父は時々教会へ来てみれば食事をしていない事も分ります。毎月会長様と私の二人分の食費を会長様にお渡ししていました。父が帰ると「お前の父親は、ばか者だ。神様より我子が可愛いゝのか。これを食わせれば飲んで食ってチョンだ、何も残らん、お前さんが一生食うに困らんように上級へお供えしてくると云われて上級へ運ばれる会長様。父親が差し上げたまとまったお金を持って行かれる会長様の嬉しそうな姿。私は親に翌日から又ひもじい思いをすることなどは一度も云った事はありません。私は、おなかがすいて起きられなくなった事がありました。するとどこからかみかぐらうたが聞こえてきました。よく聞くと会長様の声です。みかぐらうたを口ずさみながら何か仕事をしておられたのです。私はその声を聞いて元気が出ました。会長様は神様のような方だと思いました。あれから年月がたって私も今は早や八十才が目の前となり、今は初代会長様の後継者としてつとめさせて頂いておりますが、人様は私がだん〳〵前会長様に似てくると云われますが、とても前会長様のような心で人様を育てさせて頂く事は出来ません初代会長様は、私に「あんたの世話にはならん」と何度も云われたけれど、御身上になられたら、私の名前を呼び続けて、食事を口の中へ入れるのでも、下着を替えるのでも、私でないと人様には一切させられず、それこそ前生の本当の親子かと思いました。どんなむごい云葉を出しても信者さんがよろこんで受取って下さるような親になりたいものと思わせて頂きます。

おわり

こころの詩

▼養徳社発行『陽気』誌十一月号、「道柳」より転載

▽今回の課題は「着」、選五十五句中、笠岡に繋がる教友の方二名、二句が見事選ばれ掲載されていましたので転載させて頂きます。おめでとうございます。

佳詠　芳阪布教所長　杉原幹夫

着座して教祖お出まし待つ廊下

佳詠　芳井分教会長夫人　佐藤香苗

紋服の試着を了えて明日地場へ

▼地場へ命運ばん

かくしん

一、おやさまを親と仰ぎて
　そして神と仰ぎて幾年月
　その理一つと拝をして
　おろがみまつりて百二十年
　はてしなき親心に今答えんと
　ぢばへ地場へと命運ばん
　世界の姉妹親神の子

二、争いをすてて六十年
　そして今親の思いに近かずかんと
　一手一つで立ち向かう
　ふんばり切りて百二十年
　存命の親心に今答えんと
　いさめや勇め命運ばん
　世界の兄弟親神の子

◈●

＊●
　●
＊●
　・●
＊●
　①●

【期　　間】　●

◈各行事に参加ご希望の方は、
各ブロックの担当者にお申し込みください

大教会だより

◎教会長資格検定講習会修了者

前期　立教168年11月14日終講

稲富士　須毛田　英　尋
弓ヶ濱　森　川　弘　志
亀田山　山　下　　満

名言&迷言

先日、二年に一度の神殿及び館内障子張り換えのひのきんが晴天のお日和の下、勇んでつとめられました。今回、行事日程の都合が合わず、それでも多忙の中お集まり下さった方々の誠真実によって、二日間の日程で張り終える事が出来ました。

親教会に少しでも伏せ込ませて貰おうと、勇んでつとめられた方、中には、「私、今回初めてで、何をしたらよいのか分からないので…」と、予定の開始時刻より随分早くお越しになり、準備段取りから、夜遅くま

秋季大祭祭文

これの笠岡大教会の神床にお鎮まり下さいます親神天理王命の御前に会長上原理一慎んで申し上げます

親神様には一列子供の陽気ぐらしを楽しみに泥海中より道具を寄せ守護を教えてこの世と人間をお創造(はじめ)になられると共に八千八度の生れ変わりを経てお育て下さいました　しかしながらその思召がかなわぬと見るや「このさきハせかへぢううハどこまでもよふきづくめにみなしてかゝる」と旬刻限の到来を待って教祖を月日の社とお定めになられてこれの世界だすけの道をおつけ下さいました事は誠に有難く勿体ない極みでございます

私共は教祖のひながたによってその思召をお聞かせ頂きたすけの理に浴すると共に一人でも多くの人にその思召を伝えようと日々は朝夕に御礼申し上げつつひながたを辿るべくたすけ一条の御用の上に勤め励ませて頂いております　その中にこの月二十六日は天保九年教祖が月日の社になられだめの御教えをお啓示(ひらき)下された元一日の日柄でございますので御本部では秋の大祭が執り行なわれますがその理にならい当大教会でも只今からおつとめ奉仕者一同立教の元一日に思いを馳せ明るく陽気に勇んで座りづとめてをどりをつとめて秋の大祭を執り行わせて頂きます　御前には実りの秋に感謝一杯の心を湛えて今日の日を楽しみに寄り集いました道の子供達が相共にお歌を唱和し改めて御礼申し上げる状を御覧下さいまして親神様にもお勇み下さいますようお願い申し上げます

さていよ〳〵本年もあと二ヶ月又教祖百二十年祭まであと三ヶ月というところまでやってまいりました　三年千日と仕切って歩んで来た今日までの成人の歩みははたしてどうだったのか秋の大祭の旬こそよふぼく一人一人がしっかりと思案させて頂きたいと今月は直轄教会へ大祭参拝をさせて頂きました　反省すべき点をしっかりと認識し残された日はあとわずかですが年祭に向けての成人の思いを更に高めて世界一列を救けたいとの親心を我が心として一人でも多くの人に伝えるべく力の限りたすけ一条の御用の上に邁進させて頂く覚悟でございます

更には本日世話人島村廣義先生に御入込み頂いておりますので旬に当たってのおぢばの声を聞かせて頂きその声を真摯に受け止め素直に実動へと移させて頂く所存でございます

何卒親神様には旬々にお聞かせ頂く親の声を頼りに神一条に歩む皆の真実誠の心をお受け取り下さいまして万たすけの上に尚も自由の御守護を賜り人々の心が真の親心に触れ一列兄弟の理に目覚めて共にたすけ一条の道を歩む人が弥増して陽気づくめの世の状が一日も早く実現しますようお導きの程を一同と共に慎んでお願い申し上げます

で、まあ精一杯におつとめになられた方もお見受け致しました。

「オーイ○○、早よーこっちに来い、○○何しょんならー、○○これ持って来てくれー。」と声を掛けられ、『目下引っ張りダコでーす』と、受け答える青年さん。頼りにされているのか、気易く声を掛けられるのかは兎も角として、ほぼ五分置きに声を掛けられる彼、その煩わしさを微塵も見せず、素直に応対する彼の態度に人柄がにじみ出て、「エー徳積んでますナー」。と微笑ましくも、頼もしく感ずる。

終始和やかな雰囲気の中で、大教会長様を芯に、奥様、婦人会、青年会、女子青年の方々の精を出す姿もあり、持ち場立場の中、無事つとめ了える事が出来ました。

張り替えの終わった障子は、照明に明るく反射し、一層身の清まる思いが致します。人生のリスタートは、障子の骨組みの如く壊す事は無理ですが、垢(シミの付いた障子)を取り除き、教えを光に、明るく反射出来る心に張り替えねばと、痛感致しました。

(ちょん)